

安政期の老中家臣による蝦夷地調査の背景
-佐倉藩の事例を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 弘毅 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21652

安政期の老中家臣による蝦夷地調査の背景

—佐倉藩の事例を中心に—

坂本弘毅

要旨 本稿は、安政三、四年（一八五六、五七）に行われた老中家臣による蝦夷地調査の経緯について検討するものである。調査そのものの実態解明は進められてきたが、これまで指摘されていない調査史料もある。また、幕末の政治外交史を踏まえた議論も十分に行われていない。そこで本稿の前半で、調査の中心的存在であった佐倉藩の調査実態を概観し、後半で、調査に至る経緯を幕末の政治外交史を踏まえ考察した。

安政三年には佐倉藩主堀田正睦と福山藩主阿部正弘の二人の老中が調査団を派遣した。老中首座の阿部正弘は安政二年二月に蝦夷地上知を決定し、翌安政三年三月に松前藩から幕府への引き渡しを完了した。しかし、蝦夷地経営の根幹に関わる政策は決定されなかった。安政三年の調査は、阿部が政策決定のための情報を欲して提案し、堀田の賛同を得て行われたものと考えられる。

安政三年は、クリミア戦争の終結により幕府のカラフト政策が転換した年であった。翌安政四年には当時の老中五人全員が蝦夷地に調査団を派遣した。いずれもカラフトに赴いているのが特徴である。カラフト政策の転換が安政四年の調査派遣に影響を与えていると見られ、単純に安政三年の調査の延長線上に実施されたわけではなかった。

以上のように、幕末期の老中家臣による蝦夷地調査の主目的は、藩主の幕閣での職務に必要な情報収集であった。本来、蝦夷地に関する情報は箱館奉行からもたらされるが、箱館奉行との間に意見の相違も見られ、老中は自ら情報を入手する必要がある。先行研究では調査の目的として、藩の立場での蝦夷地開発、藩士の蝦夷地進出も注目されていた。しかし、調査団は幕政や日露関係の影響を受けて派遣されたものであり、老中が政策遂行に必要な情報を収集するための調査という視点こそ重要である。

キーワード…幕末期、蝦夷地調査、老中、佐倉藩、堀田正睦

はじめに

本稿の課題は安政三、四年（一八五六、五七）に行われた佐倉藩士による蝦夷地調査を素材に、老中が蝦夷地に家臣を派遣するに至った経緯を明らかにすることにある。

佐倉藩主堀田正睦は、安政二年一〇月に老中首座、安政三年一〇月に対外関係の専任である外国事務取扱に就任した。当時の蝦夷地は、その開発や日露国境画定、箱館開港などで政治的・外交的に重要な地域であった。そのため、幕府は安政二年二月に蝦夷地直轄を決定し、翌安政三年三月に松前藩からの引き渡しを完了する。この直後に堀田は蝦夷地に家臣を派遣した。安政三年には堀田と阿部正弘の老中二名が、安政四年には当時の老中五人全員（堀田正睦・阿部正弘・久世広周・牧野忠雅・内藤信親）が蝦夷地に家臣を派遣した。

安政期の老中家臣による蝦夷地調査を取り上げたものとして、杉谷昭氏の「安政年間における蝦夷地政策」がある。^①杉谷氏は各藩の調査記録の内容を紹介するとともに、箱館奉行村垣範正の記録から各藩の調査団が箱館奉行所発行の先触を必要としていたことを指摘した。自治体史では『新札幌市史』がこの蝦夷地調査を取り上げている。^②『新札幌市史』は参加者、行程、調査記録など基本的な事項を整理し、現札幌市域での各藩調査団の行動を明らかにした。

その後、濱口裕介氏が考察を深め、その目的を「①上知直後の蝦

夷地の実情を把握すること、②その上で幕府の蝦夷地経営方針を検討し、また今後実施すべき具体的な開発計画を立案すること、③そのかたわら、老中らがおのおのの藩における家臣を在任として蝦夷地に移住せしむことの是非と得失を探ること」と整理した。^③調査の背景や調査活動の実相についても検討しており、濱口氏の研究が現在の到達点といえるだろう。

佐倉藩士による蝦夷地調査についても、たびたび検討されており、調査の基本的な事実関係はある程度明らかになった。^④しかし、これまで指摘されていない調査史料もあり、本稿の課題を検討するためにも、参加者や行程、調査史料を今一度整理する必要がある。

老中家臣による蝦夷地調査は幕末の政治外交史と密接な関わりがある。しかし、これまでは調査の事実経過に注目するあまり、豊富な研究蓄積のある幕末の政治外交史を踏まえた議論が十分になされてこなかった。幕末の政治外交史には分厚い研究蓄積があるが、老中家臣による蝦夷地調査との関わりで言えば、開国期の政治と外交について考察した後藤敦史氏、^⑤幕末期の蝦夷地上知過程と樺太問題について検討した麓慎一氏、^⑥カラフトにおける日露関係を論じた秋月俊幸氏の研究などが重要である。そもそも、蝦夷地調査は老中の蝦夷地への関心を示す事例として捉えることができる。老中家臣の蝦夷地調査を検討することは、幕末期の政治外交を考える上で意義がある。

以上の先行研究と課題を踏まえ、本稿では老中家臣による蝦夷地

調査について、佐倉藩の調査を概観した上で、調査に至る経緯を幕末期の政治外交を念頭に置きながら考察する。調査団を派遣した五つの藩のなかで佐倉藩に注目するのは、安政三、四年の二年間にわたって調査した点、調査記録が豊富に残存している点という理由による。すなわち、佐倉藩の蝦夷地調査は当該期の歴史像を構築していく上で格好の素材なのである。

一 佐倉藩の蝦夷地調査

1 安政三年の蝦夷地調査

(1) 参加者

安政三年（一八五六）の調査参加者は七名であった（表1）。黒沼隆三への蝦夷地調査指令に「諸事窪田官兵衛・佐治岱次郎・佐波銀次郎江可承合」と窪田が筆頭に記されていることと調査時の禄高を踏まえると、リーダーは窪田と判断できる。派遣された藩士は漢学・洋学・兵学・絵など学識ある人物であった。佐倉藩家臣についての史料『分限帳』・『保受録』などの記載をもとに、主な参加者について述べる。

窪田官兵衛^①は漢学を修めており、藩校成徳書院のうち漢学を学ぶ温故堂にたびたび勤務した。窪田は昌平齋や儒者斎藤拙堂などのもとで学んでいた。藩から処分を受けたこともあったが、漢学者としての学識の高さが評価され参加者に選ばれた。『保受録』には

「同四年巳年二月三日、昨年中御内用ニ而奥州辺江被差遣候処、此

度別人江被仰付ニ付、最早不及罷越旨」とあり、安政四年の調査には参加しなかった。調査後は病気のため療養を続けていたが、安政六年に病死した。

佐治岱次郎は長沼流兵学を修め、藩の兵制改革に尽力した。明治維新後は佐倉藩少参事、堀田家家令を歴任した。

佐波銀次郎は安政三年の調査参加者の中で唯一、安政四年の調査にも参加した。嘉永六年（一八五三）から三年間、洋学の修行をし、安政二年には大筒方頭取となった。調査後の安政五年から二年間、洋学修行のために老中脇坂安宅のもとに派遣された。その後、文久二年（一八六二）には蕃書調所、翌文久三年には神奈川奉行に出仕した。

黒沼隆三は絵師として調査に参加したようである。しかし、調査中にソウヤで病気にかかり調査から離脱する。九月六日江戸に到着し、一日に御用向を御免になった。同日、「蝦夷地地利絵図御用」として、そのまま江戸に残ることを命じられた。この職務は一月七日に終わった。黒沼の絵画の腕を見込んでの蝦夷地派遣、「蝦夷地地利絵図御用」だったといえるだろう。黒沼は洋画家浅井忠に絵を教えたことでも知られる。

林弥六は測量・数学を修めていた。嘉永五年には成徳書院雑務に任じられた。窪田同様、林も安政四年の調査に参加予定だったが、別人に変更された。

【表1】安政3年蝦夷地調査参加者一覧

氏名	生没年	格（『分限帳』）	役職（調査時）	禄高（調査時）	禄高（調査後）
窪田官兵衛	1819-1859	給人	五番組岡新之丞組附	80石	—
佐治岱次郎	1823-1906	給人	成徳書院執事	—	10人扶持（1863）
佐波銀次郎	1825-1891	御通掛	大筒方頭取	—	25俵3人扶持（1861）
黒沼隆三	1824-1891	御通掛	郡方旧記調手伝除切	—	22俵2人扶持（1857）
林弥六	1824-?	御通掛以下	鉦太鼓方、成徳書院執事勤	14俵2人扶持	16俵2人扶持（1862）
金太郎	—	—	—	—	—
壮平	—	—	—	—	—

『保受録』、『分限帳』、濱口裕介「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」より作成。

【表2】安政3年佐倉藩蝦夷地調査関係史料一覧

史料名	作成・差出	宛先	年代	所蔵
協和私役	窪田官兵衛（子蔵）	—	1856	・『日本庶民生活史料集成』第4巻（活字） ・北海道大学附属図書館（写本？） ・函館市中央図書館（写本） ・公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵、 佐倉市寄託史料（写本） ・北海道立図書館（写本） ・成田山弘教図書館（写本）
箱館ヨリソウヤ迄路程書取	窪田官兵衛？	—	1856.7.16	北海道立文書館
取急き大乱筆不文御察読可被下候 〔カラフト渡海決定の旨〕	佐治岱次郎	家兄（茂右衛門）	1856.6.27	『佐倉市史』巻2、1424-25頁（活字）
〔帰府決定の旨〕	佐治岱次郎	南山家兄	1856.7.16	『佐倉市史』巻2、1425-26頁（活字）
〔帰府決定の旨〕	佐治岱次郎	南山家兄	1856.9.20	『佐倉市史』巻2、1427頁（活字）
北遊隨草	佐波銀次郎	—	1856	北海道大学附属図書館（複写本）
西蝦夷図巻	黒沼隆三？	—	1856?	北海道大学附属図書館
上〔蝦夷地開発ニ関スル上書〕	林弥六	堀田正睦	1857.3.1	・『下総佐倉藩堀田家文書』R209（マイクロフィルム） ・公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵、 佐倉市寄託史料

『新札幌市史』、濱口裕介「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」より作成。

（2）行程【図1】

佐治・窪田・佐波は安政三年五月九日、林・黒沼は同月一日に蝦夷地派遣の命を受けた。五月二〇日に江戸を出発し、六月二三日箱館に到着する。箱館では、箱館奉行堀利熙・組頭河津三郎太郎に面会し、「何分当年は時節後にて唐太・エトロフ島渡海は相成間敷やにより、東西蝦夷地のみ見置仕」と述べた。¹⁵箱館を二八日に出発し、七月一五日ソウヤ（宗谷）に到着する。

一度は断念した「唐太渡海」であったが、アイヌが「当年の如き大暑は不覚」、「扱は唐太渡海も未だ遅れず」と言うのを聞き、¹⁶窪田は佐治・佐波と「唐太渡海」について相談し、ソウヤ詰の役人梨本弥五郎に願ひ出て、「唐太渡海」が決定した。これを受けて黒沼と金太郎は江戸に戻る事となる。黒沼については病気にかかっていたためである。その後、渡海を試みるが天候不順のためうまくいかず、結局断念して七月二四日ソウヤを出発する。ソウヤからはオホーツク海沿岸・太平洋沿岸を進み九月二五日に松前に到着する。九月三〇日に松前を出発し、十一月九日江戸に帰着した。

（3）調査関係史料【表2】

安政三年の調査関係史料は複数現存する。ここでは、複数の写本が知られる窪田官兵衛『協和私役』の書誌学的検討を行い、先行研究で触れられていない窪田官兵衛？「箱館ヨリソウヤ迄路程書取」、林弥六「上〔蝦夷地開発ニ関スル上書〕」を紹介する。



【図1】安政3年調査団の行程（木部誠二『福山藩蝦夷見分「観国録」と有所不為齋雜録の北方関係史料』付図をもとに『協和私役』より作成）

窪田官兵衛『協和私役』

詳細な記述は早くから注目され、昭和四四年（一九六九）に翻刻・出版された¹⁷。この翻刻は、北海道大学附属図書館所蔵本（以下、北大本）を基とし、函館市中央図書館所蔵写本（以下、函館本）と校合している。北大本、函館本以外に、北海道立図書館と成田山仏教図書館の写本（以下、それぞれ道立図書館本、仏教図書館本）が知られる。道立図書館本は、北海道庁の罫紙が使用され、「河野常吉資料275」と分類されていることから、河野常吉が北海道史編纂の過程で写したものと考えられる。仏教図書館本は千葉の郷土史家小原大衛が昭和一〇年に写したもので『蝦夷紀行』と題されている²¹。

この四つの写本はすでに先行研究で挙げられているが、それ以外に公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵史料にも『協和私役』（以下、佐倉本）がある。佐倉本には「佐治藏書」という印が押されていることから、佐治家がもとと所蔵していたようである。佐治家には安政三年の佐倉藩蝦夷地調査に参加した佐治岱次郎²²がいる。明治期に堀田家の命で旧佐倉藩士が藩史編纂事業を行っており、その際に佐治家から堀田家に納められたと考えられる。佐倉本は四つ目袋綴の和装本で、五冊からなる。一冊目は箱館から石狩まで、二冊目は石狩から宗谷まで、三冊目は宗谷からケネカワツカライ（現中標津町）まで、四冊目はケネカワツカライからサル、（現えりも町）まで、五冊目はサル、から松前まで、という構成で

ある。この構成は北大本、函館本と一致する。道立図書館本は一冊にまとめられている。仏教図書館本は一から三、四と五をそれぞれまとめ、二冊構成となっている。

これらの写本のなかで最も成立が古いと考えられるのは北大本である。なぜなら、北大本に施されている多くの修正が、道立図書館本、函館本、佐倉本、仏教図書館本に反映されているからである。北大本以外の成立順については、八月一六日、一七日条を比較して考えてみたい。北大本を含めて引用する（傍線引用者）。

八月一六日条

【北大本】 是モチャ／＼山ト云、シレトコノ者真ナリ

【道立図書館本】 是もチャ／＼山と云、シレトコの者真なり

【函館本】 是もチャ／＼山と云、シレトコの者真^{虫熊}□□

【佐倉本】 是もチャ／＼山と云、シレトコの者真^{付箋}「虫喰不分」

【仏教図書館本】 是もチャ／＼山と云、シレトコの者真なり

八月一七日条

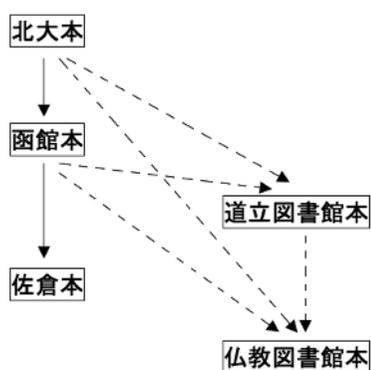
【北大本】 夜ニ入り風西北ニ転ス、風大ニシテ雨晴ル

【道立図書館本】 夜に入り風西北に転ず、風大にして雨晴ル

【函館本】 夜に入り風西北に転ず、風大にして雨晴^{虫熊}□□

【佐倉本】 夜に入り風西北に転ず、風大にして雨晴、

【仏教図書館本】 夜に入り風西北に転ず、風大にして雨晴る



【図2】『協和私役』の系統

【表3】「箱館ヨリソウヤ迄路程書取」内容一覧

1	アイヌの風俗・性格
2	場所請負人や松前藩への批判
3	新田墾開
4	蝦夷地支配
5	蝦夷地での通行

上記史料より作成。数字は掲載順。

佐倉本八月一六日条の「虫喰不分」という付箋は函館本の虫損部分を受けて記したとみられる。佐倉本八月一七日条の「、」も函館本の虫損部分を強引に読もうとしたため、「、」と記すことになったと考えられる。したがって、佐倉本は函館本を典拠としている可能性が高い。ここから、北大本→函館本→佐倉本という系統が見えてくる。

道立図書館本は北大本から写したか、虫損する前の函館本から写したものと思われる。仏教図書館本は道立図書館本と同じ文字使用であるが、成立年代が道立図書館本より新しいので、道立図書館本を写した可能性もある【図2】。

高倉新一郎氏は北大本を写本とするが、その根拠は示していない。前述の通り、北大本には多くの修正が施されているが、これだけ修正が多いと写し間違えた箇所のみ訂正したとは考え難い。そうすると、北大本は本当に写本なのかと疑問が湧いてくる。仮に写本だとすると、原本を写したあとで、大幅な修正を加えたことになる。今後さらに調査する必要があるが、現段階で筆者は北大本が原本の可能性もあると考えている。

窪田官兵衛？「箱館ヨリソウヤ迄路程書取」

北海道立文書館の阿部家文書の一部として所蔵されている。阿部家においても阿部正弘（老中・福山藩主）により、安政三、四年に蝦夷地調査が行われた。佐倉藩の調査史料が阿部家に伝存していたことは大変興味深い。どの段階で阿部家に入ったのかはわからないが、福山藩は安政三年、東蝦夷地のみを調査していたので、西蝦夷地の情報を欲して、佐倉藩から入手した可能性も考えられる。史料では前半に蝦夷地政策に関する五つの一つ書き（表3）、後半にこれまでの路程が記されている。蝦夷地調査を踏まえた意見がまとめて記された史料は管見の限り、林弥六「上」〔蝦夷地開発二関スル上書〕（後述）と福山藩士石川和介『観国録 丙辰上書』のみである。この点からも貴重な史料といえよう。

「箱館ヨリソウヤ迄路程書取」は安政三年七月一六日に記された。七月一六日はソウヤ（宗谷）でカラフト渡海のため風待ちをしていた。この日に渡海できないことになり、その空いた時間で記したと

いう。

著者及び宛先の記入はないが、表紙に朱書きで「堀田備中守様御家来」と記されており、佐倉藩士が記したことは明らかである。史料中に「墾田之之地^(マ)少々^(マ)の場所ニ候得共岱次郎・銀次郎罷越目撃仕候業大根・サ、ゲ・木瓜等多分出来居候」とあるが、「岱次郎・銀次郎」という書き方は『協和私役』と一致する。さらに、「私事先年遊歴仕候節下之関より乗船順風二者候得共大坂迄百五十里と申を二日二夜ニ而着船仕候」とある。窪田は諸国を遊歴していることから、窪田によって記されたと推定できる。

林弥六「上〔蝦夷地開発ニ関スル上書〕」

『下総佐倉藩堀田家文書』に収められている⁽²⁸⁾。林弥六は、安政四年三月一日に上申書を二つ提出しており、一方には「蝦夷地開発ニ関スル上書」、もう一方には、「開国進取之意見ニシテ所説具体的ナリ」と付箋が貼られている。上申書双方に、以前提出した上申書に書き漏らしたことがあるため再び記したとある。林は安政四年の調査から外されることが同年二月三日に決定しており、それを受けて記したものと考えられる。以前の上申書の詳細は不明であるが、「上〔蝦夷地開発ニ関スル上書〕」は安政三年の蝦夷地調査を踏まえたものとなっている。林は堀田に御目見得できないので、堀田へ見せていただきたい旨を記している。全五〇条からなり、その内容は多岐にわたる（表4）。

【表4】林弥六「上〔蝦夷地開発ニ関スル上書〕」内容一覧

1	焙硝の不足について	26	昆布について
2	金山・銀山について	27	蝦夷地にて取れ候魚、交易の品に用いたき旨
3	鉄山・銅山・鉛山について	28	帆立貝について
4	箱館近所栽培の野菜について	29	モンベツ石について
5	新製農具ボツカ堀について	30	石炭について
6	白・杵について	31	蝦夷人細工について
7	木挽遣わしたき旨	32	蝦夷地の沼に鴨白鳥など渡来の旨
8	炭焼について	33	鷺について
9	種痘したき旨	34	シコタン島の動物について
10	馬を増やしたき旨	35	トッ・ヲットセイについて
11	蝦夷人へ五穀食しさせたき旨	36	柳の大木について
12	蘭薬ヲクリカンギリについて	37	きのこについて
13	松前でとれるものについて	38	木について本州と蝦夷地の比較
14	蘭薬について	39	竹について
15	葡萄酒つくりたき旨	40	江戸徘徊の乞食非人蝦夷地へ遣わしたき旨
16	ハマ、シケにてヲクリカンギリ食したる旨	41	蝦夷地海防について
17	大木について	42	大艦での往来について
18	柏の木について	43	大艦の製造、蝦夷地往来について
19	槐の木について	44	蝦夷地警衛について
20	柝の木について	45	ソウヤの気候について
21	ヲツコの木について	46	ソウヤの鳥について
22	ホウの木について	47	蝦夷地の寒さについて
23	ヲヒウの木について	48	蝦夷地各所の気温
24	雑木林について	49	北蝦夷地土人人数について
25	木賊について	50	クシンコタンで魯西亜人日本人雇用の旨

上記史料より作成。数字は掲載順。

【表5】安政4年佐倉藩蝦夷地調査参加者一覧

氏名	生没年	格（『分限帳』）	役職（調査時）	禄高（調査時）	禄高（調査後）	所在	調査先
須藤秀之助	1827-?	給人	御手留方	—	100石（1862）	江戸	カラフト
佐波銀次郎	1825-1891	御通掛	大筒方頭取	—	25俵3人扶持（1861）	江戸	カラフト
酒井勝蔵	—	御通掛	装束方、小勘定 火用方	17俵2人扶持	18俵2人扶持（1864）	江戸	カラフト
源吉	—	—	中間	—	—	江戸	カラフト
島田丈助	?-1873?	御通掛	成徳書院勤番 御徒目付仮役	19俵3人扶持	22俵3人扶持（1858）	佐倉	エトロフ
三橋清一郎	—	御通掛以下	成徳書院雑務	10俵2人扶持	12俵半2人扶持（1860）	佐倉	エトロフ
今村次郎橋	—	御通掛以下	町組	9俵半2人扶持	11俵半2人扶持（1861）	佐倉	エトロフ
長蔵	—	—	中間	—	—	佐倉	エトロフ

『保受録』、『分限帳』、濱口裕介「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」より作成。

2 安政四年の蝦夷地調査

（1）参加者

安政四年の調査参加者は八名であった（表5）。佐波銀次郎を除いて他の参加者は全て入れ替わっている。安政四年の調査ではカラフト方面とエトロフ方面に分かれて調査をしており、それぞれ、カラフト調査団、エトロフ調査団と呼ぶことにする。藩士の格を比べると調査団全体かつカラフト調査団のリーダーは須藤、エトロフ調査団のリーダーは島田といえる。³⁰【表5】からは江戸詰の藩士がカラフト方面、佐倉詰の藩士がエトロフ方面に派遣されていることがわかる。カラフト方面に派遣された藩士にはリーダーの須藤があり、他の藩士の禄高もエトロフ方面に派遣された藩士よりも若干高い。ここから、カラフトの調査が重視されていたことがうかが

えるが、その理由については後述する。この年も前年同様学識ある藩士が派遣されている。以下、主な参加者について述べる。

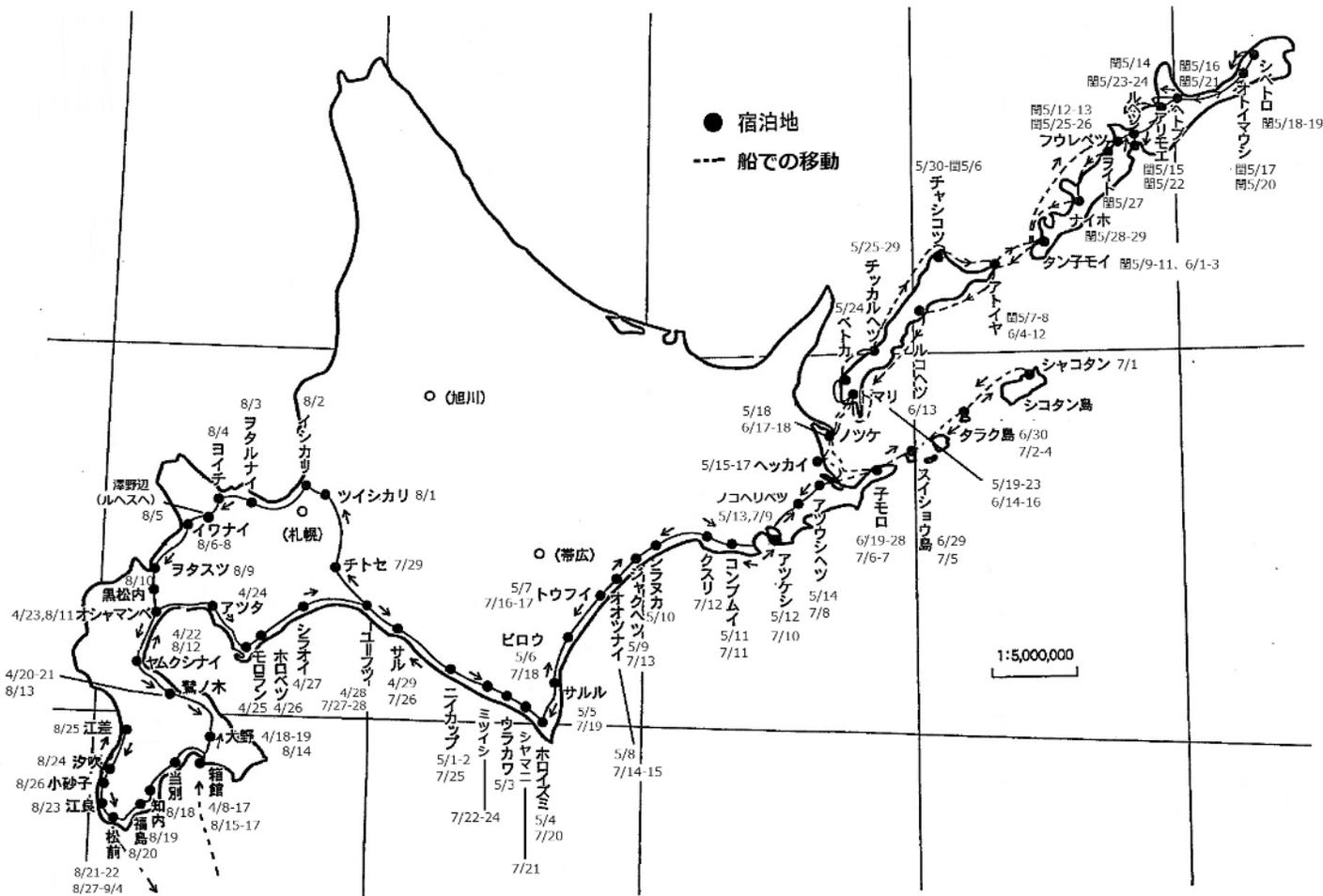
須藤秀之助は近習や手留方といった役職に就いており、藩士の側に仕えていた。砲術や兵学を修めており、海岸防禦にあたっている陣の世話や兵制取調御用のために江戸から佐倉に来るようにたびたび命じられている。安政二年には大筒役、翌安政三年には軍事調役に任じられており、軍事関係に明るかったようだ。調査後の安政五年には、藩主堀田正睦が条約勅許を得るため上洛した際に同行した。翌安政六年には近習頭に任じられている。

島田丈助は窪田の代わりに調査に参加した。³¹窪田と同じく島田も漢学を修めており、温故堂での勤務経験がある。

今村治郎橋は弘化四年（一八四七）に「町組江御入人」を仰せ付けられており、町関係の勤めをしていた。今村の調査日記『蝦夷日記』には「金壺両繪具代酒井勝蔵分受取」（二月二三日条）、「宿小嶋松右衛門分屏風并扇面之画被頼」（四月一三日条）といった記述があり、今村は絵師として調査に参加していたようである。³²

（2）行程【図3、4、5】

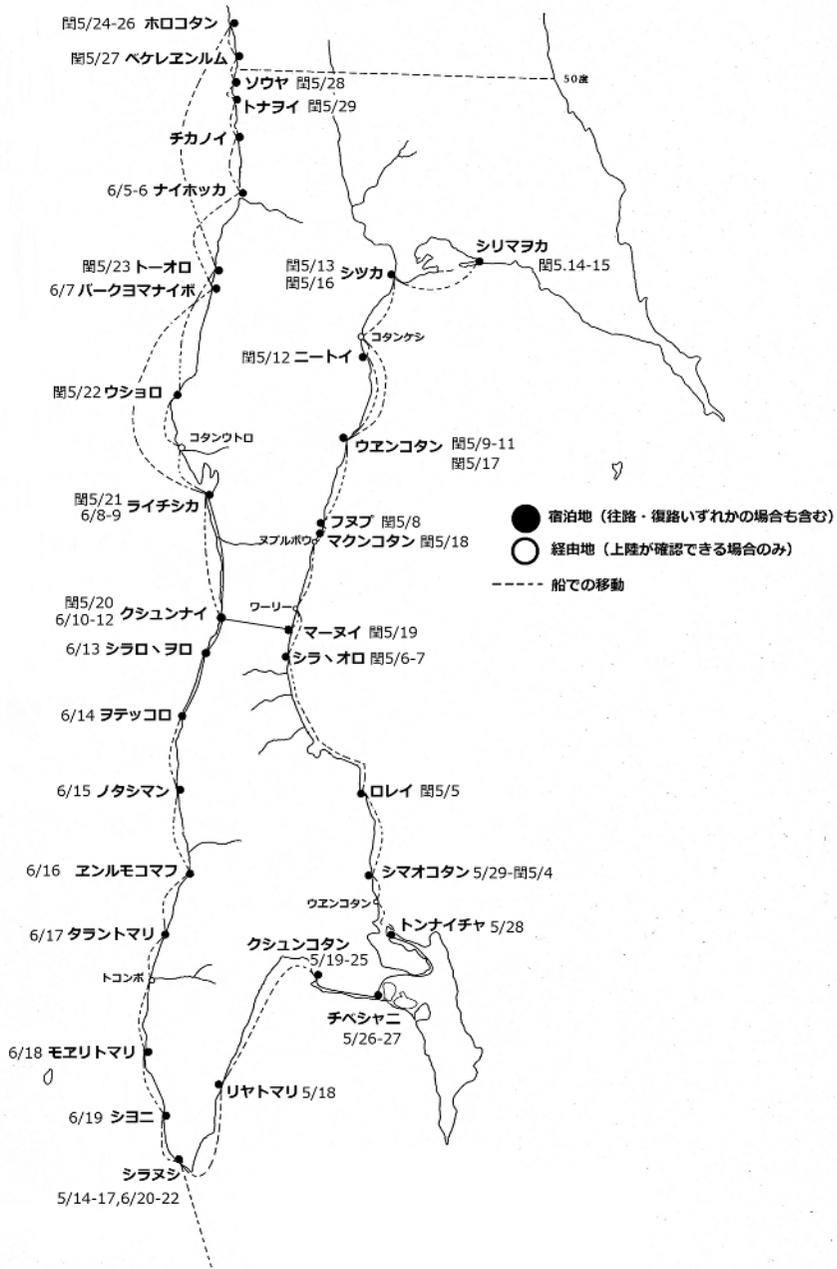
須藤・今村・三橋は安政四年一月二三日、酒井は二月三日に調査の命を受けた。今村は二月一九日に佐倉を出立し、翌二〇日に江戸に入った。三月五日、江戸を出立し、奥州道中を北上して蝦夷地を目指した。四月八日に平館を出帆、箱館に到着した。八日に箱館を出立した。



【図3】安政4年エトロフ調査団の行程（本田克代・吉田千萬「史料紹介 佐倉藩士のクナシリ島・エトロフ島調査」所収地図を加筆・修正）



【図4】安政4年カラフト調査団の行程1（木部誠二『福山藩蝦夷見分「観国録」と有所不為齋雑録の北方関係史料』付図をもとに『北遊随草』より作成）



【図5】安政4年カラフト調査団の行程2 (木部誠二『福山藩蝦夷見分「観国録」と有所不為齋雑録の北方関係史料」付図をもとに『唐太紀行』『北遊隨草』より作成)

【表6】安政4年佐倉藩蝦夷地調査関係史料一覧

史料名	作成	年代	所蔵
唐太紀行	須藤秀之助	1857	・成田山仏教図書館（写本） ・北海道大学附属図書館（複写本）
北蝦夷画帖	須藤秀之助？	1857	函館市中央図書館
北遊隨草	佐波銀次郎	1857	北海道大学附属図書館（複写本）
蝦夷日記	今村次郎橘	1857	・佐倉市寄託史料 ・北海道大学附属図書館（複写本）
東蝦夷図巻	今村次郎橘？	1857？	北海道大学附属図書館

『新札幌市史』、濱口裕介「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」

箱館を出立した一行は、四月三日にヲシヤマンベ（長万部）に到着し、ここでカラフト調査団とエトロフ調査団に分かれた。エトロフ調査団はその後も東海岸沿いに進んでいき、五月八日にノツケ（野付）に到着した。翌一九日～六月一七日にかけてクナシリ島・エトロフ島、六月二九日～七月六日にかけては歯舞群島を調査している。その後太平洋沿岸を戻り、九月五日松前から平館に渡った。六日に平館を出立したエトロフ調査団一行は、羽州道中・奥州道中を南下し、一〇月一日千住に到着し、調査を終えた。

一方、カラフト調査団は五月一三日ソウヤに到着し、翌一四日～六月二二日にかけてカラフトの調査を行っている。帰路はソウヤから日本海側を南下し、八月二日箱館に到着した。箱館から江戸までの行程を記した記録が残っていないので、江戸帰着の日は定かではないが、一〇月一日から三日の間と推定されている。³³

（3）調査記録【表6】

安政四年の調査記録も複数現存しているが、ここでは、次節で活用する須藤秀之助『唐太紀行』と行程図作成の際に参照した佐波銀次郎『北遊隨草』の概略を述べる。

須藤秀之助『唐太紀行』

成田山仏教図書館に写本が所蔵されている。³⁴ この写本は全一冊四巻からなる和装本で、昭和一〇年に『蝦夷紀行』（『協和私役』のこと）と同じく小原大衛によって写された。本文は五月一四日のカラフトへの渡海から六月八日にライチシカに至るまでである。ライチシカからソウヤに戻るまでの記述も存在したと考えられている。³⁵ 本文は風土・気候・先住民族の生活・他藩調査団や役人との交流の様子などが詳細に記されている。

佐波銀次郎『北遊隨草』

北海道大学付属図書館に複写本が所蔵されている。³⁶ 佐波は安政三年にも日記を残しており、こちらも史料名は同じ『北遊隨草』だが別の史料である。³⁷ 裏表紙には「カラフト巡島記 佐倉佐波」とある。四月八日箱館着からカラフトを調査して八月七日箱館風待機中までの日記である。『唐太紀行』の記述はカラフトの行程のみなので、それ以外の蝦夷地での動向を知るうえで欠かせない史料である。日記の始まる前の部分にクシユンコタン、クシユンナイの役土人の名前、場所詰御役人の役料を記している。簡単な挿絵も描かれている。

二 幕末の政治外交と蝦夷地調査

1 蝦夷地上知と蝦夷地調査

安政期の老中家臣の蝦夷地調査の背景として、濱口裕介氏は蝦夷地上知やカラフトでの国境画定問題をあげる⁽³⁸⁾。この点について、幕末の政治外交史を踏まえ、より詳細な考察を進めたい。まずは、安政三年（一八五六）の老中家臣による蝦夷地調査の提案者について検討する。福山藩主阿部正弘に関する史料『懐旧紀事』のうち、蝦夷地調査についての記述を引用する⁽³⁹⁾。

公、（阿部正弘）家臣石川和介・寺地強平・山本橋次郎ヲシテ蝦夷二赴カシム、蝦夷地開拓ハ箱館奉行ニ委任セリト雖モ、公同列ト謀リ、各家臣三四輩ヲ遣シ地理・風土・民情ヲ視察セシム

この史料をもとに、『新札幌市史』は阿部正弘（福山藩主）の提案とする⁽⁴⁰⁾。一方、濱口氏は、阿部の提案とは読み取れず、老中らが共同で計画したとする⁽⁴¹⁾。濱口氏の指摘するように、この史料だけでは阿部の提案とは読み取れない。他の史料を踏まえ検討しよう。窪田官兵衛『協和私役』八月一三日条には「初め我公福山侯と約すらく、共に使を發して夷地民物風土を巡視せん」とあり、堀田正睦と阿部正弘が約束して蝦夷地に使を派遣しようとしていたことがわかる。安政三年に家臣を派遣したのはこの両名だけである。福山藩士は同年五月七日に蝦夷地に向けて江戸を出発する⁽⁴²⁾。一方、佐倉藩士が蝦夷地調査の命を受けたのは福山藩士出發後の同月九日

（佐治岱次郎・窪田官兵衛・佐波銀次郎）と同月一日（林弥六・黒沼隆三）である。先に調査団派遣を実行した福山藩主阿部が調査の提案者ということができるだろう。

では、なぜ阿部は調査を提案することになったのか。蝦夷地上知の過程を踏まえて考えてみたい。安政元年二月、目付堀利熙・勘定吟味役村垣範正が松前蝦夷地調査を命じられる。調査を終えた両名は同年九月、広大な蝦夷地を松前藩だけで警衛・経営するのは難しく、松前地を除く蝦夷地一円を上知するべきであるとの上申書を老中へ提出した⁽⁴³⁾。

蝦夷地上知をめぐる、箱館奉行竹内保徳はまず東蝦夷地のみを上知することを主張したが⁽⁴⁴⁾、水戸藩前藩主徳川斉昭は松前地を含めた全島の上知を阿部正弘に要求するなど意見の違いが見られた。最終的に安政二年二月二日、幕府は西在乙部村以北・東在木古内村以東の蝦夷地一円を上知することを松前藩に通達した⁽⁴⁵⁾。この蝦夷地上知の最終決定を下したのが当時老中首座の阿部正弘である。

松前藩から幕府への引き渡しは翌年三月に完了し、その統治は箱館奉行が担った。箱館奉行は支所として蝦夷地各地に御用所を常置し、役人を詰めさせた。また、蝦夷地の警衛には南部・津軽・仙台・秋田各藩があたり、松前藩も箱館近辺を警衛した。しかし、蝦夷地を幕府が直轄支配するか諸大名に分領するか、場所請負制を廃止するか否か、という蝦夷地経営の根幹に関わる政策は決定されていなかった⁽⁴⁶⁾。こうした政策に関わる情報を阿部正弘が欲していたと

みて間違いないだろう。

ところで、安政二年二月の上知決定から安政三年の調査団派遣に至るまでの間に幕閣内で動きがあった。安政二年一〇月九日に老中首座が阿部から堀田正睦に交代したのである。阿部は水戸藩前藩主徳川斉昭とともに強硬外交路線を取っていたが、その限界を感じていた。蝦夷地上知についても阿部は斉昭の意見を退けている。溜詰大名との関係が悪化したこともあり、斉昭と距離があり溜詰の堀田を老中首座に据えることで、「溜詰大名との関係修復」、「外交路線の転換」を目指したのである。老中首座を堀田に譲ったとはいえ、阿部が幕政の第一線を退いたわけではなく、しばらく阿部体制は続いていた。⁵⁰ 外交方針も通商の開始という点で堀田と阿部は一致しており、⁵¹ 蝦夷地調査を提案することに何ら支障はなかったと思われる。

つまり、安政三年の調査は蝦夷地上知の決定を下した阿部正弘が政策に関わる情報を欲して提案し、堀田の賛同を得て行われたものと考えられる。なお、安政三年の調査予定地は福山藩がクナシリ・エトロフ方面、佐倉藩がカラフトであった。ここから両藩が分担し蝦夷地を調査しようとしていたことがうかがえる。

2 カラフトと蝦夷地調査

安政四年は五人の老中全てが家臣を蝦夷地に派遣した。いずれもカラフトに赴いているのが特徴である。その理由は、「安政三年の

両家の結果を重視した他の老中も、翌四年各々実施に踏みきったもの」とされているが、⁵² 安政三年から四年にかけての政治外交状況を踏まえて考えたい。

安政元年一二月、日露和親条約が締結された。条約において、下田・箱館・長崎の開港と日露国境が定められた。千島列島はエトロフ島・ウルップ島間を国境とすることが定められたが、北蝦夷地（カラフト）に関しては国境未画定となった。

一八五三年三月に始まったクリミア戦争の影響により、ロシアのカラフトでの活動は下火になっていた。クリミア戦争は一八五六年三月に終結し、その報を受けた老中は「唐太蚕食」の危機が迫っていることを推測する。⁵³ 幕府はこの危機に対応するため、箱館奉行の三人体制、⁵⁴ 幕吏のカラフトでの越冬、⁵⁵ 幕府直営漁場の設営を決定する。⁵⁶

こうした一連の北蝦夷地政策の中で注目したいのがオロッコ（現ウイルタ）への撫育である。安政三年一二月、老中は北緯五〇度以南に住むオロッコ撫育について箱館奉行、海防掛大目付・目付に諮問する。⁵⁷ 箱館奉行竹内は明確な反対をしないものの否定的な見解を示し、⁵⁸ 海防掛大目付・目付は反対した。⁵⁹ しかし、老中は同年一二月、オロッコの撫育を決定する。⁶⁰ その理由を麓慎一氏はプチャーチンとの「長崎交渉以来日本側が提示してきた北緯五〇度〓樺太半島⁶¹に沿うためにオロッコの撫育は必要不可欠」であったと考察する。⁶²

老中がオロッコへの撫育を進めていくためには、現地の情報が必

要であろう。しかし、蝦夷地の情報をもたらず箱館奉行はオロッコ撫育には否定的であり、有益な情報をもたらすとは限らない。そこに老中たちが家臣を蝦夷地へ派遣し情報収集する理由が生じてくる。

このように、安政三年はクリミア戦争の終結により、カラフトの情勢が大きく変化した年であった。この年は佐倉藩士がカラフトを調査する予定であったが断念している。翌安政四年に佐倉藩だけではなく、すべての老中がカラフトに家臣を派遣した経緯にはカラフト情勢の変化が影響しているといえるだろう。つまり、安政四年の調査は単純に前年の調査の延長線上に位置するものではないのである。

老中が主張した北緯五〇度と蝦夷地調査の関係についても触れておきたい。当時、北緯五〇度以南（西海岸については五〇度過ぎのホロコタンまで）を日本領とするのが幕府の基本姿勢であった。⁽⁸²⁾ 老中家臣の調査団が調査したのもこの範囲で、西海岸の北限は五つの藩がホロコタン、東海岸の北限は福山藩・佐倉藩が北緯約四九度のシリマオカであった。⁽⁸³⁾ すなわち、老中は日本領と想定している範囲を調査させたのである。実際に、佐倉藩士須藤秀之助は「ホロコタンを過ぎ魯境を踏む意な」と述べ、ホロコタンを日露国境とする方針を認識していたことがうかがえる。⁽⁸⁴⁾

ただし、佐倉藩士は北緯五〇度以北の情報も入手していた。安政四年に北蝦夷地を調査した須藤秀之助はシラヌシで足軽江沢門四郎

から安政三年にワッチシでロシア人と接触した話の話を聞く。江沢は安政三年に箱館奉行組頭向山源太夫の調査に同行して、「ライチシカより願の上独行して極北ナツコに至」った人物である。須藤『唐太紀行』からその一部を引用する。⁽⁸⁵⁾

唐太ハ全島我⁽⁸⁶⁾に属し松前の島とエトロフ等ハ日本領なりと云、江沢掉頭して否らずと云しに彼又一片の地図を示し是より南方日本地なりと指しを見るにクシユンナイ・ナヨロの辺と思はるロシア人がカラフト全島の領有を主張したという江沢の報告は、箱館奉行を通じて安政三年一〇月、江戸にも届けられている。⁽⁸⁶⁾ また、ホロコタンではスメレンクル（現ニヅフ）からホロコタン以北の地形、スメレンクルの戸数、ロシア人の活動実態などを聞いている。⁽⁸⁷⁾

3 蝦夷地調査の目的

老中が調査の目的について言及した史料は管見の限り見出せない。先行研究では、調査記録の記述をもとに調査の目的を検討している。『新札幌市史』は、蝦夷地において「藩としてどのような対処のしかたがあるのか、また箱館奉行の施策と協調できる分野があるかどうかを探ろうとした」と考察している。⁽⁸⁸⁾ 濱口裕介氏は調査の目的を「①上知直後の蝦夷地の実情を把握すること、②その上で幕府の蝦夷地経営方針を検討し、また今後実施すべき具体的な開発計画を立案すること、③そのかたわら、老中らがおのおのの藩におけ

る家臣を在住として蝦夷地に移住せしむことの是非と得失を探ること」の三点に整理した。⁶⁶⁾

蝦夷地直轄によって蝦夷地の支配は箱館奉行が担い、蝦夷地の情報は箱館奉行から老中にもたらされた。老中の蝦夷地政策において箱館奉行の見解が重視されていたことも指摘されている。⁷⁰⁾ それにもかかわらず、家臣を蝦夷地に派遣した理由は何か。その理由として濱口氏は③の老中らの家臣移住を挙げる。

ただし、濱口氏自身も③を「かたわら」と述べているにもかかわらず、『新札幌市史』や濱口氏は藩の立場での蝦夷地開発や蝦夷地進出を強調しすぎているように感じる。そのため、老中の家臣という視点が弱くなっている。調査で最も重要なことは、藩主の幕閣での職務に資する情報を収集することである。そもそも、老中らが家臣を蝦夷地に派遣することは、老中らの藩による蝦夷地移住の検討や藩の立場からの蝦夷地開発への協力に必ずしもつながるとは限らない。それは、「家臣による情報収集の量や質が、藩主の幕政運営の遂行につながっていく」からである。⁷¹⁾

杉谷氏は『懐旧紀事』の「蝦夷地開拓ハ箱館奉行ニ委任セリト雖モ」の文言に着目し、「老中たちが箱館奉行を全面的に信頼できなかった事情を表している」とする。⁷²⁾ 老中が蝦夷地政策を行う上で、箱館奉行以外からの情報を得ておいて損をすることはない。特に前述したオロッコの撫育のように、老中と箱館奉行との間に意見の不一致がある場合はなおさらであろう。

また、ほぼ同じ時期に派遣された老中の家臣たちは、道中で会った際に交流している。佐倉藩士の場合、福山藩士と会えば「閑語夜に徹す」ほど話が弾み、関宿藩士が険しい道を進むと聞けば「我等其労を慰して遣る」という様子であった。⁷³⁾ 福山藩士とはカラフトで行程の相談も行っている。⁷⁵⁾ 関宿藩士成石修輔は福山藩士石川和介について「石川ぬしいつにかわらぬ懇なる教示給りぬれば、こころに嬉しく二百里外知る人もなき中なれば、おのれが藩の人の如くに、頼もしくもかたじけなくもおほえ侍る」と述べている。⁷⁶⁾ このように、同じ老中家臣として協力して調査をしようとする意識が垣間見られる。

以上の状況からも、幕末期の老中家臣による蝦夷地調査の主目的は、藩主の幕閣での職務に必要な情報収集であることがうかがえる。『新札幌市史』や濱口氏のいう、藩の立場での蝦夷地開発や蝦夷地進出の意識は全くなかったとは言えないが、副次的であったと考えられる。さらに、その意識は調査中に小さくなったと考えられる。佐倉藩士林弥六は「御大名者大小分限に應し領国之開発も追々有之國中善政にいたし候ニ無暇ニ付、此上大地切開候者余計物々相成候ニ付御持被成候而も開発無詮事と奉存候」と述べ、蝦夷地の土地を手に入れて開発しても報われないとする。福山藩士石川和介は「諸家江御預ケ之可否者先ツ不宜方ニ可有御坐、無挾公辺御一手御開拓之外無之儀と奉存候」と、諸大名への分割に否定的な見解を示す。林弥六や石川和介は、蝦夷地の開発の難しさを痛感しており、

藩士を蝦夷地に移住させようとは思わなかっただろう。

おわりに

本稿では、佐倉藩蝦夷地調査の全体像を把握し、幕末の政治外交を踏まえて老中家臣による蝦夷地調査を考察した。その結果明らかになったのは、老中が蝦夷地に家臣を派遣するに至った過程である。安政三年（一八五六）の老中家臣による蝦夷地調査は、福山藩主阿部正弘の提案のもと、佐倉藩主堀田正睦とともに行われた。阿部が積極的に蝦夷地調査に乗り出した背景として、蝦夷地上知後に未だ定まっていなかった政策の決定に資する情報を求めていたことが考えられる。安政三年は、クリミア戦争終結により幕府のカラフト政策が転換した年であった。この出来事が安政四年の調査派遣に影響を与えていると考えられ、単純に安政三年の調査の延長線上に実施されたわけではなかった。また、調査の目的として、先行研究では藩の立場での蝦夷地開発、藩士の蝦夷地進出が注目されている。しかし、調査団は幕政や日露関係の影響を受けて派遣されたものであり、老中が政策遂行に必要な情報を収集するための調査という視点こそ重要である。

最後に調査後の動向について少し述べておきたい。堀田正睦は安政四年以降、ハリスとの対応に追われており、安政五年に条約勅許を得るため京都に赴いたが失敗する。大老井伊直弼の登場により同年六月二三日、堀田は老中を罷免された。豊富な調査記録を残した

佐倉藩の蝦夷地調査の成果は幕政に生かされたとは言えない。⁷⁹⁾

しかし、調査成果が全く活用されなかったわけではない。安政四年一〇月、西周助（周）は一橋慶喜に蝦夷地開発に関する上申書を提出する。⁸⁰⁾これはおそらく佐波銀次郎の情報をもとに作成されたのだろう。なぜなら、安政五年四月、西が蕃書調所に採用になった際の身分は「堀田備中守家来佐波銀次郎厄介」となっているからである。⁸¹⁾さらに、同年一二月一六日、佐波は西の仲人を務めており、佐波と西の関係の深さがうかがえる。このような調査成果の活用が他にも見られたかについては、他藩の状況も含め今後の課題としてい。

注

- (1) 杉谷昭「安政年間における蝦夷地政策」『研究論文集』第三三集第二号（I）、佐賀大学教育学部、一九八六年。
- (2) 札幌市教育委員会編『新札幌市史』第一巻通史一（札幌市、一九八九年）、第四編第三章第一節、君尹彦執筆部分。
- (3) 濱口裕介「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」『史友』第三五号、二〇〇三年、四九頁。
- (4) 青柳嘉忠「佐倉藩の絵かき」『佐倉市史研究』第二号、一九八四年）、鈴木忠「佐波銀次郎の生涯」『佐倉歴史顕彰会、一九九一年）、濱口裕介「須藤秀之助『唐太紀行』——佐倉藩士のカラフト調査記録を読む——」『佐倉市史研究』第一七号、二〇〇四年）、同「『講演録』幕末期カラフトを踏査した佐倉藩士たち——『北蝦夷画帖』『唐太

- 「紀行」から見えること―(『佐倉市史研究』第三二号、二〇一八年)、本田克代・吉田千萬「史料紹介 佐倉藩士のクナシリ島・エトロフ島調査」(『北海道の歴史と文化』北海道出版企画センター、二〇〇六年)、坂本弘毅「安政四年の佐倉藩蝦夷地調査と奥蝦夷地の実態」(北海道出版企画センター『北海道・東北史研究』第一一号、二〇一八年)。
- (5) 後藤敦史「開国期徳川幕府の政治と外交」有志舎、二〇一五年。
- (6) 麓慎一「幕末における蝦夷地上知過程と樺太問題」『歴史学研究』第六七一号、一九九五年。
- (7) 秋月俊幸『日露関係とサハリン島』筑摩書房、一九九四年。
- (8) 佐倉市総務部行政管理課佐倉市史編さん担当編『保受録徒以下末々迄』佐倉市、二〇〇三年、一八八頁。
- (9) 公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵。現在佐倉市に寄託されている(請求記号・C11~C4)。成立は慶応年間。「上ノ上」、「上ノ下」、「下ノ上」、「下ノ下」の四冊からなる。近年、その翻刻が刊行された(野尻泰弘ほか編『史料集 佐倉藩幕末分限帳』明治大学駿河台キャンパス野尻研究室、二〇一九年)。
- (10) 大谷貞夫編『下総佐倉藩堀田家文書』雄松堂フィルム出版、一九八八年、リール一四〇四三。『保受録』には寛政年間に編纂された『保受録』と、寛政年間から文久年間までをまとめた『保受録』がある。後者は『保受録家老以下新番格迄』一四冊と『保受録徒以下末々迄』三冊の計一七冊からなる。『保受録徒以下末々迄』は翻刻、出版されている(前掲注(8))。『保受録徒以下末々迄』。
- (11) 兄の平野縫殿重久は年寄、城代次席、版籍奉還後には佐倉藩大参事などを歴任した人物である(家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』3、新人物往来社、一九八八年、七一、七二頁)。
- (12) 斎藤拙堂には『海外異伝』『魯西亜外記』などの著作があり、海外事情にも通じていた。窪田は斎藤から海外事情についても学んでいたとみられる。
- (13) 前掲注(10)『下総佐倉藩堀田家文書』リール五、「文明公記」一六。嘉永六年(一八五三)二月、逼塞の処分を受け、二〇石召上、席給人末席とされた。これは遊学の暇を賜ったにもかかわらず、「妻の家に寓居し、子を生ましめ」たためである。翌年二月に逼塞は解かれたが、「分限帳」の窪田毅太郎(官兵衛の子)の項には「安政六未十月十六日、亡父官兵衛跡式八十石被下置、格式給人末席」とあり、石高・格式はその後も変わらなかったようである(前掲注(9))野尻ほか編『史料集 佐倉藩幕末分限帳』五四頁)。
- (14) 前掲注(4)青柳「佐倉藩の絵かき」六頁。
- (15) 『協和私役』六月二四日条、「日本庶民生活史料集成」第四巻、三一書房、一九六九年、二二五頁。以下、『協和私役』のページ数は『日本庶民生活史料集成』による。
- (16) 同右、七月一五日条、二二七頁。
- (17) 前掲注(16)『日本庶民生活史料集成』第四巻。
- (18) 請求記号・旧記三二五。
- (19) 請求記号・K290クホ5010。本稿では北海道大学附属図書館所蔵の複写本を利用した(旧記一一九一)。
- (20) 道立図書館本(請求記号・094/KO/236)、仏教図書館本(請求記号・ロ467010002)。
- (21) 成田山文化財団成田図書館編・発行『成田図書館蔵書分類目録』六、一九八〇年、四七九頁。
- (22) 公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵、佐倉市寄託史料(請求記号・Y25~29)。佐倉本『協和私役』の存在については土佐博文氏(佐倉市史編さん担当(当時))のご教示を得た。
- (23) 真辺将之「明治期『旧藩士』の意識と社会的結合」『史学雑誌』第

- 一一四編第一号、二〇〇五年、八一頁。
- (24) 前掲注(16)『日本庶民生活史料集成』第四卷、二三四頁。
- (25) 請求記号・B20。北海道立文書館では、「堀田備中守御家来箱館ヨリソウヤ迄路程書留」と登録されている。「書留」とあるが、表題を見ると「書取」と書かれている。
- (26) 本部誠二『福山藩蝦夷見分「観国録」と有所不為齋雜録の北方関係史料』添川廉齋遺徳顕彰会、二〇一七年。
- (27) 前掲注(10)『下総佐倉藩堀田家文書』リール五、「文明公記」一六。
- (28) 前掲注(10)『下総佐倉藩堀田家文書』リール二〇九。
- (29) 林の格である「御通掛以下」は藩主に御目見得できない(藤方博之・長谷川佳澄「解説」前掲注(9)野尻ほか編『史料集 佐倉藩幕末分限帳』二八五頁)。
- (30) 佐倉藩士の格は、上から「給人」「中小姓」「御通掛」「御通掛以下」の四つに分かれていた(木村礎ほか編『藩史大事典』第二巻、雄山閣、一九八九年、四六七頁)。
- (31) 前掲注(10)『下総佐倉藩堀田家文書』リール五、「文明公記」一六。
- (32) 今村次郎橋『蝦夷日記』今村喬氏所蔵、佐倉市寄託史料。本稿では北海道大学附属図書館所蔵の複写本を使用した(旧記一五五〇)。
- (33) 前掲注(4)濱口「須藤秀之助『唐太紀行』」—佐倉藩士のカラフト調査記録を読む—。
- (34) 請求記号・ロ4679-0001。北海道大学附属図書館にはその複写本が所蔵されている(旧記一五四八)。
- (35) 以上、前掲注(4)濱口「須藤秀之助『唐太紀行』」—佐倉藩士のカラフト調査記録を読む—。
- (36) 請求記号・旧記一五絵五(一)。
- (37) 北海道大学附属図書館蔵(請求記号・旧記一五五四(二))。
- (38) 前掲注(3)濱口「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」。
- (39) 濱野章吉編『懐旧紀事』一八九九年、七六八頁。
- (40) 前掲注(2)『新札幌市史』第一巻通史一、六六九頁。
- (41) 前掲注(3)濱口「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」三八頁。
- (42) 『協和私役』八月三日条、二四七頁。
- (43) 前掲注(39)濱野編『懐旧紀事』七六八頁。
- (44) 以上、「第日本古文書 幕末外国関係文書」七巻、二四七号、六五七〜六七五頁。
- (45) 同右、七巻、二四九号、六七八〜六七九頁。
- (46) 『水戸藩史料』上編乾、五七一〜五七二頁。
- (47) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』九巻、一三二号、二七三〜二七四頁。
- (48) 前掲注(6)麓「幕末における蝦夷地上知過程と樺太問題」一三頁。
- (49) 以上、前掲注(5)後藤『開国期徳川幕府の政治と外交』二二八頁。
- (50) 吉田常吉『安政の大獄』吉川弘文館、一九九一年、七五頁。
- (51) 前掲注(5)後藤『開国期徳川幕府の政治と外交』二五三頁。
- (52) 前掲注(2)『新札幌市史』第一巻通史一、六六九頁。
- (53) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』一四巻、一五〇号、四二九〜四三〇頁。
- (54) 同右、一四巻、一九二号、五六四〜五六五頁。
- (55) 同右、一五巻、一九号、四九〜五二頁。
- (56) 同右、一五巻、四二号、九五〜一〇〇頁。
- (57) 『統通信全覽』類輯之部 一五 警衛門、雄松堂出版、一九八六

- 年、一六〇頁。
- (58) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』一五巻、一一二号、二五六―二五八頁。
- (59) 前掲注(57)『統通信全覧』類輯之部 一五 警衛門、一五七頁。
- (60) 同右、一五二頁。
- (61) 前掲注(6) 麓「幕末における蝦夷地上知過程と樺太問題」一五頁。
- (62) 前掲注(7) 秋月『日露関係とサハリン島』一三五頁。
- (63) 前掲注(3) 濱口「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」五五頁。
- (64) 『唐太紀行』閏五月二〇日条。
- (65) 『唐太紀行』五月一六日条。
- (66) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』一五巻、三六号、八三―八六頁。須藤が聞いた話と地名など若干の齟齬が見られるが、概ね内容は一致している。
- 須藤が「江沢少く魯語を解せり」(五月一六日条)と記していることは、日本人のロシア語学習の点で興味深い。浅利政俊氏は近世北海道でのロシア語学習は三期に分けられると考察した。すなわち、第一期は寛政期にラクスマン一行から学ぶ時期、第二期は文化期にゴロウニンとその部下モウルから学ぶ時期、第三期は安政五年にロシア領事館が設置されて以降、領事や宣教師から学ぶ時期である(浅利政俊「近世北海道におけるロシア語通辞・ロシア語習得に関する教育史考察(上)」『松前藩と松前』第二一号、一九八四年、五八頁)。浅利氏は第二期のち「北海道で再びロシア語の習得がなされ始めるのは箱館開港にともなってロシア領事館が安政五年、箱館に置かれてから」とする(浅利政俊「近世北海道におけるロシア語通辞・ロシア語習得に関する教育史考察(下)」『松前藩と松前』第二二号、一九八四年、五六頁)。カラフトではロシア人との接触が相次ぎ自然とロシア語を理解する和人が出てきたものと思われる。浅利氏はこの状況を教育とみなしていないために考察対象としていないのかもしれないが、領事館開設前にロシア語を少しではあるが理解する人物がいたことは見逃せないと考ええる。
- (67) 『唐太紀行』閏五月二六日条。スレメンクルへの聞き取りについては濱口氏の分析も参照されたい(前掲注(5) 濱口『講演録』幕末期カラフトを踏査した佐倉藩士たち―『北蝦夷画帖』『唐太紀行』から見えること―)一四頁。
- (68) 前掲注(2) 『新札幌市史』第一巻通史一、六六九頁。
- (69) 前掲注(3) 濱口「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」四九頁。
- (70) 門松秀樹「開拓使と幕臣」慶應義塾大学出版会、二〇〇九年。
- (71) 根岸茂夫『講演録』佐倉藩堀田家とその家臣団『佐倉市史研究』第二三三号、二〇一〇年。
- (72) 前掲注(1) 杉谷「安政年間における蝦夷地政策」一一〇頁。
- (73) 『協和私役』八月一三日条、二四七頁。
- (74) 『唐太紀行』閏五月三日条。
- (75) 『唐太紀行』五月二四日条。
- (76) 『東徼私筆』四月一二日条、大野良子校註『東徼私筆』政界往来社、一九七八年、三七頁。
- (77) 林弥六「上(蝦夷地開発ニ関スル上書)」前掲注(10)『下総佐倉藩堀田家文書』リール二〇九。
- (78) 以上、前掲注(26) 木部「福山藩蝦夷見分「観国録」と有所不為齋雑録の北方関係史料」三五九―三六〇頁。
- (79) 前掲注(2)『新札幌市史』第一巻通史一、六七二頁。前掲濱口「安政年間における老中家臣の蝦夷地調査」五八頁。

- (80) 西周「西家譜略」大久保利謙編『西周全集』第三卷、七三四頁。
(81) 同右。
(82) 前掲注(4)鈴木『佐波銀次郎の生涯』三八頁。

Background to Survey Missions to Hokkaido and Sakhalin Dispatched by Members of Shogun's Council of Elders in the Middle Nineteenth Century

SAKAMOTO Hiroki

The purpose of this paper is to consider the background to survey of Hokkaido and Sakhalin, conducted under the order of members of Shogun's Council of Elders in 1856 and 1857. The major purpose was to gain information necessary and useful for the administration of the Tokugawa Shogunate. Hokkaido and Sakhalin belonged to the Matsumae Fuedal domain in most of the Tokugawa Period. In 1855, these islands transferred to the direct control of the Tokugawa Shogunate in order to cope with challenging issues, such as the development of these large islands, opening of the Hakodate port to foreign countries, and determining the national border with Russia.

Immediately after the transfer, two members of the Council of Elders, HOTTA Masayoshi (1810-1864) and ABE Masahiro (1819-1857), dispatched a survey team to Hokkaido in 1856. HOTTA was the head of the Council of Elders and the feudal lord of the Sakura Domain in the present northern Chiba Prefecture. At that time, the Shogunate had not fixed any fundamental policies concerning the management of Hokkaido and Sakhalin. Therefore, ABE considered it necessary to gather information necessary for deciding the policies, and HOTTA agreed with him on the dispatch.

In 1857, all the five members of the Council of Elders dispatched survey missions to Hokkaido and, more importantly, Sakhalin. The author considers that the background to the survey in this year should be distinguished from that of 1856 because the Tokugawa Shogunate changed policies on the management of Sakhalin in 1856. This change was an outcome of the end of the Crimean War in 1856 where a battle also took place in Kamchatka peninsula.

In this paper, the author also summarizes the aspects of the survey missions dispatched by HOTTA who played the central role in the surveys in Hokkaido and Sakhalin, including the party members, survey routes, and records of the surveys.

Keywords: middle nineteenth century Japan, diplomacy of the Tokugawa Shogunate, Hokkaido and Sakhalin.